短波少年

12月19日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

12月19日のおはなし「短波少年」

　短波放送のためにラジオ番組の構成作家をしていた時期がある。といってもぼくはプロの構成作家ではなくて、本当にひょんなことからまずラジオドラマを書くことになり、かれこれ1年半ほど続けたのである。実を言うとそれまでただの一度もラジオドラマを書いたことがなかった。ところがいろいろな誤解があって（はっきり言ってしまえば、間に入った人物の意図的な経歴詐称があって）、ぼくはすでに何クールもこなしているイキのいい若手ということになっていたのだ。

　余計なことは何も言うなと言われていたので、番組のプロデューサーとの打ち合わせでもぼくは、仲介者の横で、椅子に深めに座ってほとんど黙ってうなずいていた。何かを尋ねられたら「大丈夫です」「やってみます」「何とかなるでしょう」のどれかで答えろと言われていたので、その通りにしてみたら、なんだかものすごくできるベテランみたいな受け答えになってしまっておかしかった。その席上、プロデューサーから面白いことを聞いた。

「短波放送の特長はやはり海を越えて聞かれていることです。我々の番組は、ですから、日本国内よりもむしろ、海外に暮らす日本人に聞かれていると思った方がいい。それもターゲットはやや上の世代です。自分の意思で日本を離れて短期で海外生活をしている人よりも、むしろ移民をした人やその子供さんやそのまた子供さんみたいに、日本人としてのアイデンティティを保とうとしている人たちです。彼らに今の日本の暮らしぶりをイメージさせてあげてください。ただしあまりネガティブにならないように」

　日本への望郷の念に応えてあげるわけですね、と思わず口に出すと、仲介者はすごくこわい顔をしてこっちを睨んできたが、プロデューサーは大きく頷いて、ああ、それさえわかっていただけば完璧です、と顔をくしゃくしゃにして笑った。

　最初に思いついたのはテレビで見慣れたトレンディードラマの焼き直しのようなモノだった。しかも意図的に、人気のレストランや、流行語や現象、売れ筋の商品などの固有名詞をばらまくのだ。どんな店が流行っているのか、そのインテリアはどんな感じなのか、何を食べさせてくれるのか、どんなドリンクが流行っているのか、若者はどんな言葉を使っているのか、いまみんなが着ているファッションはどんな感じで、彼らはどんな部屋に暮らしどんな音楽を聴きどんな本を読みどんな映像を観ているのか……。通常なら流行りモノを紹介する情報番組で使うような内容も、いま日本にいない人にとっては使えない情報でしかない。けれどもドラマのアイテムとして出てくる分には、イメージをふくらませる材料として有効なのだ。

　ぼくの書いた、この『週末はMARS STONEで』というドラマは意外にも好評で、年が明けるとすぐにプロデューサーは新しい企画にも入って欲しいと言ってきた。また仲介者と並んで話を聞くと『短波少年』という番組を作りたいという。思いきりパクリじゃないかと思ったのだが、ぼくの書いているドラマもほとんどテレビの情報のパクリと言ってもいいような有様だったので黙っていた。

「やだなあ。突っ込んでくださいよ。パクリじゃないですか！って」プロデューサーは照れ笑いしながら言った。「そういうノリでやりたいんです」
　ぼくは「大丈夫です」と言うか「何とかなるでしょう」と言うか迷ったが、結局違うことを答えた。
「来年くらいになったら、突っ込みます」
　プロデューサーは嬉しそうに何度もうなずき、打ち合わせに入った。でもぼくに来年はなかった。

　プロデューサーがぼくを選んだ理由は、流行のアイテムをストーリーの中に織り込んでいくバランス感覚がいいと思ったからだということがわかった。それをお笑いバラエティー番組の中でもできないかというのだ。そこでぼくが思いついたのは、「店ほめ」と「懸賞ダービー」という

ものだった。後者は3組の若手芸人が懸賞に応募し続け、最初に総額100万円に達したチームが勝ちというモノだったが、流行りのアイテムの名前をズラズラ並べられるのだけがメリットで、あまり盛り上がらなかった。やはり本家のしかけは見事だと思った。

　一方前者は、話題の流行飲食店を訪れた若手芸人がリッチに飲み食いした後、オーナーやシェフの前で店をほめると言うだけのものなのだが、あらかじめ伝えておいた8つのキーワードを上手に織り込んでほめなければならないという制限があり、うまく言えれば飲食費は番組持ち、失敗すると自前で負担というもので、落語の「家ほめ」をベースに、いろいろな番組のパクリでつくった。これは料理の名前や調理法、建築様式やインテリア、テーブルコーディネートなど、その場を想起させるキーワードをたくさん使えたので、意外にも人気があった。

　番組の打ち切りが決まったのは、だから全く予想もしていないことだった。プロデューサーからは単なるスポンサーの意向としか説明がなかったが、仲介者が後に事情を説明してくれた。話はすごく単純で、海外移民の2世、3世の中に、目算もなく帰日というか来日というかする者が続出し、それどころかそのまま生活困難な状態に陥るケースが激増し、調べてみるとその多くが『短波少年』や例のトレンディードラマなど、要するにぼくの番組を聞いていたというのだ。

「やりすぎたってことだな」仲介者は言った。「あんた、あいつらの郷愁に火をつけすぎたんだ」

　こうしてぼくのラジオ構成作家時代は終わりを告げる。『週末はMARS STONEで』の作家宛に1通のファンレターのようなものが届くのはそれからまた何年かたってからのことである。

（「短波」ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

短波少年

http://p.booklog.jp/book/40925

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/40925

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/40925

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.